

鑑定^や亜空間倉庫^が

APPRAISAL

HYPERSPACE

チートと言われてるけど、
それだけで異世界は生きていけるのか



MAGAKI

著 はがき

ILLUSTRATION:TYONE

登場人物紹介

CHARACTER

メイ

パーティー『桜花乱舞』のメンバー。エルフで元シスター。

アリサ

パーティー『桜花乱舞』のメンバー。めんどくさい性格をしている。

モーラ

パーティー『桜花乱舞』のメンバー。人族と巨人族のハーフ。

ヨシト＝サカザキ

本編の主人公。ある日突然、目が覚めたら異世界にいた。ややスケベ。

メリッサ

ポーター志望の犬人族の少女。やたらとヨシトにつきまとう。

シマ

魔獣ホワイトフェンリル。なぜかヨシトに懐いている。



目次

プロローグ	7
-------	---

第一章 ヨシト、異世界に降り立つ	12
------------------	----

第二章 ヨシト、仲間を得る	122
---------------	-----

第三章 ヨシト、チートを知る	231
----------------	-----

プロローグ

「アリサ！ 右！」

「わかってるわよ、モーラ！」

右から灰色狼^{ダイアーウルフ}が鋭い牙を剥^むき、華奢^{きゃしゃ}な少女の肩に飛びかかる。

「くっ！ ダブルスティング！」

アリサはそれかわしつ、すれちがいざまに両手に持った短剣を二本ともダイアーウルフの胴体突き刺した。すると、ダイアーウルフは煙となり、魔石と毛皮がドロップ品としてダンジョンの床に落ちる。

アリサはかわしたつもりだったが、前脚が肩をかすったようで、そこから血が溢^{あふ}れていた。それに気づいた、杖を持った少女が慌^{あわ}てて声をかける。

「アリサ、回復します！ ヒーリング！」

その間にも、アリサは次の敵に目を向けていた。

「モーラ！ 追加が二匹来るわよ！」

「もうあたしにも見えてるよ！ タウント・ロア！ ウオオオオオオオ！」

大柄の女性——モーラがスキルで咆哮^{ロウ}すると、追加でやってきたダイアーウルフは、彼女に釘^{くぎ}づけになった。

「ディフェンスオーラ！」

「サンキュ！ メイ子！」

杖を持った少女——メイに補助魔法をかけてもらったモーラは、追加の二匹のダイアーウルフに向けて盾を構える。

モーラが盾であしらいながら、隙^{すき}を見て剣で斬りつけている間に、気配を殺していたアリスがダイアーウルフの後ろに現れた。

「……ファイアスラッシュ」

アリスが魔法で火を纏^{まと}わせた短剣で、ダイアーウルフを突き刺す。

「キヤイイイン！」

ダイアーウルフが燃え上がり、煙となる。同時にモーラが、もう一匹のダイアーウルフの心臓に剣を突き刺した。二匹とも魔石と毛皮のドロップ品に変わる。

「今のうちにさっきの小部屋に！」

ダイアーウルフのドロップ品もそのままに、モーラのかけ声で三人は、二時間ほど前までいた小部屋に急いで戻った。

「メイ子、お願い」

「はい、ホーリーガード」

三人が小部屋に入ったところで、メイが魔法を唱えると、室内に神聖な魔力が充満し、魔物を遠ざける結果となった。

「ふう、こりゃキツイね」

「モーラ、アンタが転移トラップを踏むからこうなったんでしょうが！」

「オークがメイ子を狙ってたんだ。アリスの『探知』を待ってる余裕はなかったんだよ！」

「もっと自分に引きつけて、メイを守ったらよかったでしょ！ あんなに前に出る必要はなかったわ!!」

「しつこい女だね！ 踏んじまったものは仕方ないだろうが！ そんな風にツンケンツンケンネチネチしてるから、ジークにも逃げられんだよ」

「なんですって！ 逃げられてないわよ！ 私がフツたのよ！」

「どうだか。ジークから聞いたよ？ やらせもしないくせに女房気取りで困るってさ」

「はあ!? なんてアンタとジークがそんな話をするのよ!? ……モーラ、まさか……」

「ふざけんじゃないよ、あたしにそんな趣味はないよ。そんなことを疑う前に、自分の魅力を磨^{みが}いたらどうだい？」

モーラは豊かな胸を両手で押し上げ、ぶるんぶるんと揺らす。

アリスは自分の控えめな胸に視線を落とし、プルプルと震え出した。

「アンタ、言っていることと悪いことがわからないの？ それを言ったら戦争しかないのよ？」

「ははっ、この程度で？ やっぱり貧相な胸の女は器も貧相だね」

「なんですって！」

「なんだい、やるのかい？」

二人が立ち上がり、胸を押しつけあうように睨みあっていると――

「あのー、そんなことより物資が……。ここから地上までの食料が足りませんよ？」

「……………」

メイは二人の言い合いに慣れていた。下らないことで喧嘩まがいになるのはいつものことだ。だから、これによって仲が険悪になることがないのも理解している。

それよりも、この状況をどうするかの方が問題だ。

「水は私の水魔法でなんとかありますが、ここはダンジョンですので魔物の死体が残ります。現地調達もできませんよ」

ダンジョンでは魔物を倒すと死体が残らない。代わりに、魔石と何かしらのドロップ品が残る。フィールドでは魔石やドロップ品にならず、死体があるまま残るので、死体から素材を剥ぎ取ったり、魔物を調理して食べることが可能だ。

「……まずいね。メイ子、あと何日持つ？」

「節約して三日というところですね」

「アリサ、ここは何階層あたりか、わかるかい？」

「……正確にはわからないわ。転移トラップを踏んだのが十八階層、ここでの魔物がダイアールフだったから、四十階台の階層なのは間違いないわね」

「四十階台か……ぶっちゃけ三日じゃ無理だね」

モーラ、アリサ、メイ、三人の女だけのパーティー《桜花乱舞》は、ランクが金級の冒険者でかなりの実力者だ。そして最高到達階層は五十階層。きちんと準備していれば、四十階台の階層でも余裕をもって探索できる。

「だから、ポーターを雇えばよかったのよ」

「今回は二十階層までの予定だったじゃないか。アリサもそれで納得したろ」

「そうだけ……」

「今回は男しかポーターがいませんでしたし、今さらそれを言っても仕方ありません。なんとか戻らないと」

「そうね。軽く食事して動き出しましょう」

アリサがメイの言葉にうなずいた。

桜花乱舞は男をパーティーに入れない。これは、三人がパーティーを組んだときに絶対のルールとして設けたものだった。男が入ると、必ず揉め事が起きるからだ。

慣れたダンジョンだったが、常に命懸けな探索が、より困難なものになったのは間違いない。

三人は気を引き締めて、残り少ない干し肉をかじり、地上を目指した。

第一章 ヨシト、異世界に降り立つ

「え？ ……いやいやいや……まじ？」

背中の痛みを目を覚ましてあたりを見渡すと、俺は何年経ってるかわからないほど古ぼけた木造建物の中にいた。

広さは四畳半ぐらい。家具や小物など一切なく、ただ今寝ていた藁わらと一つのドア、その隣にガラスの入っていない小窓がある。光が差し込むその小窓から外を見ると、往来には人が行き交っていて、奥にも建物が見える。どこかの街の通りのようだ。いずれにしても日本とは思えない。

「まさか……来たかコレ……」

俺は建物から出た。日差しが燦々さんさんと降り注ぐ。眩しまぶさから手をおでこにあてて光を遮りさへぎつつ、あたりを確認する。

「間違いない、異世界だ……」

往来にいる人々は、まちがいに日本とは異なっていた。

彼らのうち半数ぐらいは、腰や背中に武器を身につけている。剣、弓、槍、あれはハンマー、メイスか？ 杖を持つ人もいる。

服だって、鉄製の鎧よろいに革のような鎧よろい、ローブを着ている人や、手に籠手こてだけつけてる人など、様々だ。

これだけでも異世界くさいが、明らかに人間じゃない者もいる。ラノベとかで出てくる獣人やエルフだ。

「やった……やったあああああああ!!」

両の拳を空に向かって振り上げると、人々が足を止めてこっちを見た。

「あつ、すみません。なんでもないです」

訝いがしげな目をしながらも、人々は動き出す。

（あぶねー、いきなり目立つちまった。つうか異世界かあ……来たいとは思ってたけど、まさか本当に来られるとは。……あれ？ 俺、死んだ？ いや、死んでないはず）

異世界転移の方法と言えば、トラックに轢ひかれたり、神に呼ばれたり、王国に召喚されたりだと相場が決まってる。だが、よくよく思い出しても、夜普通にベッドで寝ただけだ。

（二十一歳で脳梗塞のうこうそく？ いや、死因なんてどうでもいい。まずはチートがあるかどうかだ）

とりあえず、さっきのボロ屋の中に戻った。

（この建物もなんなんだ？ 見たところ、接する通りはメインストリートくさいのに、ボロくて完全に浮いている）

そちらは考えてもわからないので、やはりまずは自分のステータスが確認できないか試してみる。「えーと、ステータスオープン、メニュー、インベントリ、インターフェース、ペーパード―

ル……おいしい、勘弁してくれよ。まさかなんもなしか？ それはハードモードすぎるだろ……あー、鑑定、おっ？」

自分が寝ていた藁を見ながら、鑑定と呟いたとき――

【藁】
稲の藁

「おお、わかった！ しかも稲があるのか！ やった！」

ゲームのように画面がポップアップされるのではなく、脳内に情報が浮かんた。
「なら自分を……嘘だろ？」

【ヨシトⅡサカザキ】

名前…ヨシトⅡサカザキ

年齢…21／性別…男／種族…人族／レベル…1

称号…なし

STR…C／VIT…D／DEX…C／AGI…C／INT…D／MEN…D

スキル…言語理解／亜空間倉庫EX／完全鑑定

【言語理解】

会話が可能になる

【亜空間倉庫EX】

魔力にかかわらず、収納容量が一定になる

【完全鑑定】

通常の鑑定より詳細がわかる

「バカにしてやがる……」

異世界と言えば剣と魔法だ。なのに魔法はおろか、近接戦闘術もない。チートが一切なかった。
「しかも完全鑑定って、完全じゃねーじゃねーか……」

説明文の曖昧さは、完全鑑定というよりも、フレーバーテキスト鑑定と言ってもいいくらいだ。
亜空間倉庫とは、いわゆるアイテムボックスだろう。だが、魔力にかかわらず容量が固定と言われても、どれだけ入るんだかはわからない。EXだから普通より入りそうだが、鑑定で確証を得ることができない。

これで完全とは笑ってしまう。いや、笑えない。

「マジかー……ハードモードタイプの異世界だったかー。まあ、それでも日本よりはいいか」

大学に入れるほど裕福な家庭でもなかった。特待生になれるほど頭もよくない。奨学金は返済が地獄だとネットで見たので、高校卒業と同時に働きはじめた。

だが、なかなかいい待遇の仕事はなく、派遣に登録して食いつないでいた。

「とりあえず、次は冒険者ギルドを探そう」

異世界なら、冒険者ギルドもきっとあるに違いない。

今まで読んできたラノベの主人公に比べてかなり冷遇されている気がしたが、現実はこのんなものと割りきって、それでも異世界に妄想を膨らませながら、掘っ建て小屋を後にした。



街をふらふらと歩く。

屋台からいい匂いがあるので何か食べてみたかったが、この世界の金がないことに気づいた。そもそも、持ち物は何もないし、もちろん金目のものもない。

ただ、昨日はコンビニに買い物に行ったときの服、シャカシャカジャージのまま寝てしまったため、今も同じ格好だった。もしかしたらこれが売れるかもしれない。見たところ、異世界人は割とカラフルな服装や、想像より近代的な服装をしている人が多いが、さすがにナイロン素材のやつはないだろう。ひょっとしたらバカ高く売れるかもしれない。

街中を歩きつつ、高級そうな服屋を探す。

歩いていると、この街は結構大きいことがわかった。メインストリートくさい道をまっすぐ進んでいるが、まだ端までたどり着かない。遠目には、余裕で高さ十メートル以上はありそうな、街を囲む壁も見える。城塞都市なのだろうか。

店内を覗いて服屋っぽい店が目についたので、ドアを開けて中に入る。

カランカランくと、ドアにつけた鈴のようなものが音を立てた。

「いらつしやい。あーらっ、なかなかいい男ね♪」

（オカマか？ 異世界にもオカマがいるのか？）

店員は筋肉ムキムキの、青い顎をした男だった。

彼が俺を舐めるように見るので少し気後れをするが、今はそれどころではない。
とりあえずは金だ。

「あの一、金は持っていないんだけど……」

店員は顔をしかめたが、すぐさま「にやあ」と笑みを浮かべた。

「ふーん、もしかしたら、今着てる服を売りたいの？」

「……すごいね、なんでわかったの？」

「アタシはプロの服屋よ？ それも、ちょー一流のね♪」

「……いくらくらいになるのかな？」

店員は、俺の周囲をくるくる回ってシャカシャカジャージを見る。時たまジャージの肌触りを確かめてるのか、俺の体を撫でるように触る。かなりぞわっとした。

そして顎に手を当てて少し考えてから、鋭い目付きで俺を見た。

「アナタ、迷い人ね？」

思わずビクツとしてしまった。迷い人が何かはわからないが、ニュアンスから、別の世界から来たと言われている気がする。

「……そんなに硬くならなくていいわ、硬くするのはベッドの上だけで十分よ。」

店員は冗談を言ってるが、目は笑ってない。俺は返答しかねて黙っていた。

「答えなくていいわ。その反応だけで十分よ。……大丈夫、黙っててあげる」

正直、店員はこんなことを言う必要はない、これは俺のために言っているのだ。

迷い人が別の世界から来た人間のことを言ってるとして、どっかに通報して、何かしらの利益になるなら、黙ってそうすればいい。そうでなかったとしても、こんな風に時間を費やす必要はない。……おそらく。

俺に情報を与える利点がないのだから、店員は善意で言ってると思われる。

それに賭けて、質問してみる。

「……迷い人ってのは？」

「このノヴァリース以外の世界から来た人よ。強い力を持った人を勇者、それ以外の人を迷い人と言うわ」

「……そんなにいっぱいいるの？」

「勇者は珍しいけど、迷い人は十年に一人くらいはいるわね」

(ということとは、今どこかにいるんだな)

迷い人はそれほど珍しくないと言われて、少し安堵した。

「アナタ、いつ来たの？」

「……今日だよ」

「あら♪ ようこそ、ノヴァリースへ♪」

俺は迷った。でもこの店員は大丈夫な気がする。もちろん、大丈夫と見せかけた作戦かもしれないが、今は無一文だ。勝負に出るしかない。

「……これを買ってくれる？ できればしばらく暮らせるくらいの金になればいいんだけど」

「アナタ、ノヴァリースに来てからまっすぐこの店に来たの？」

「ほぼまっすぐかな？ いや、まっすぐだな。他にはどこにも寄ってない」

「本当に？」

店員の質問の意味がわからなかった。

「うん、物理的にもまっすぐ来た。この大通りしか通ってない」

「よかったわ。アナタ、運があるわね」

「どういこと？」

少し柔らかな表情になっていた店員が、また厳しい表情になった。

「その服は価値が高いものよ。迷い人の世界にしかないはず。目が利く人間に見つからなくてよかったわね。……見られてたら、死んでたかも」

(やっぱりナイロンは、この世界ではレアか。でも殺されるほどとは……)

「い、いくらくらいになるのかな？」

「そもそもアタシに売ってもいいの？」

「無一文だから」

「なら、ありがたく買おうわ。大金貨二十枚でどう？」

「……大金貨の価値がわからないんだけど」

「貨幣には、銅貨、銀貨、金貨、白金貨、黒金貨があるわ。銅貨百枚で銀貨一枚よ。それ以降も一緒。そして、それぞれに『大』があつて、十枚分の価値があるわ。銀貨十枚で大銀貨一枚つて具合にね。大体、アパート暮らしの夫婦二人で一ヶ月生活するのに、銀貨五十枚つてとこね」

単純計算で、一人なら銀貨五十枚で二ヶ月、金貨一枚で四ヶ月。ということは、アパート暮らしなら、大金貨二十枚で七十年近く暮らせるってことだ。

「そうだな……じゃあ、そんなにいいものじゃなくていいから、この服の代わりになる服と靴が欲しい。それプラス大金貨二十枚でどうかな？」

既に十分だと思つてはいたが、おまけをねだつてみた。

「いいわ。下着と靴下を五セット、シャツとズボンを二つずつ。あと、スワンプトードの革でできた靴をつけるわ。どうかしら？」

「価値がわからないから任せるよ」

スワンプトードつてカエルだろう。カエルの革靴つてのがちよつと心配だが、いざとなったら買

い直せばいい。所詮、服も装備も消耗品だ。

「なら決まりね」

「この服は『ジャージ』と言うんだ。柔らかいし、部屋着なんだよ」

「なんでもいいのよ、珍しければ」

少しこの世界のことや日本のこと、気をつけた方がいいことなどを雑談してから、ジャージを渡し、新しい服を貰った。

着替えのとき、寒気がする視線を感じたが、そのくらいは我慢だ。

代わりに貰った服は綿と麻の混合みたいな肌触りだった。靴はカエルと聞いていたけど、カエルだとは想像できないくらい丈夫だった。履き心地も悪くない。

予備の服は、革でできたリュックに入れて、店員から手渡された。

「また相談にいらつしやい」

「助かったよ、ありがとう」

「可愛い子はいつでも歓迎よ。服のことじゃなくても相談にいらつしやいな」

俺はリュックと大金貨十九枚と両替してもらった金貨十枚を持って、店を出た。



気になっていた串焼きの屋台に行つてみた。だが、金貨では買えないらしい。

そりやそうか、串焼きは銅貨二枚だった。金貨を渡せば、銅貨九十八枚と銀貨九十九枚をお釣りにしなければならぬ。仕方なく両替がわりに、高級そうな食堂を探す。

が、ここでもまた一つ気づいた。文字が読めないのだ。

服屋のときと同様に、ガラス越しに店内を覗いて確かめようと思う。

（ガラスはあるのか。そりやそうか、迷い人は十年に一人だっけ？　なら知識チートは無理かな？）
と思っていたら、ベッドが描かれた看板を見つけた。これは宿屋だろう。ここで何日分かを払って、両替することにした。

建物はレンガ造りで、なかなか綺麗だ。そこそこ高級なんじゃなからうか。

だが、入り口にドアがない。西部劇の酒場のような、両開きになる板が二枚ついてるだけだ。

（ドアの開閉の金具がある。蝶番があるなら鑄造法が存在するのか？　なら風呂釜もあるかな？）

中に入ると、一階は食堂のようだ。丸いテーブルと椅子四脚のセットが、左右に五個ずつある。中央は通り道になっていて、奥にはカウンターがあり、そこに女性の店員がいる。

「いらつしやいます。銀の鐘亭でございます」

――猫耳だ！

テーブルに座って飯を食べている何組かの客から、じろじろと見られたが、気にしないようにしてカウンターに向かい、猫耳の女性に話しかける。

「すみません、一人なんです、部屋は空いてますか？」

「はい、ございます。一泊銀貨三枚ですが、大丈夫ですか？」

その価格なら、金貨一枚で三十日以上泊まれる。

全く問題ないが、聞かれ方が気になった。金を心配されるほど高級なのだろうか。

「とりあえず十日お願いできますか？」

「朝晩の食事をつけるなら、一泊につき大銅貨五枚追加です。お湯を使われるのでしたら、一回につき大銅貨一枚いただきます。ランタンは一回分の油で大銅貨一枚です」

「お風呂はないんですか？」

「オフロ？　サウナでしょうか？」

「いや、お湯に浸かるような」

猫耳の女性店員は目を見開いた。

「失礼しました。お客様は貴族様でしたか。知らぬとはいえ申し訳ありません」

「あつ、いや、違いますよー！」

「……貴族様でもないのに、お湯に浸かるのですか？」

（なるほど……お風呂は普及してないのか……迷い人がいるのに、なんかおかしいな）

「いや、ここは高級だから、もしかしたらと思つてね」

「……申し訳ありません。確かに西区ほど安い宿ではありませんが、貴族様が満足されるような施設ではございません」

「大丈夫。じゃあ、毎日食事をつけて、お湯もランタンも貰えるかな」

「かしこまりました。お支払は先にちようだいできますか？」

「いいよ、はい」

俺は金貨一枚をカウンターに置いた。猫耳女性は金貨を見てびっくりしたようだが、俺の顔と金貨を交互に見て何かを納得したようだ。

（金貨でさえ、あまり普段使いたくないのか。こりや、貴族と思われたかな？ まあ、いいか。でも貴族は風呂に入るんなら、技術自体はありそうだな）

お釣りの大銀貨六枚、銀貨二枚、大銅貨十枚を貰い、部屋に案内される。建物は三階建てで、俺の部屋は三階の一番奥だった。

「本日の朝食の分も料金をいただいています。召し上がられますか？」

「ここで食べられる？」

「大丈夫です。では部屋にお持ちします」

猫耳女性は部屋を出ていった。

「ふう〜」

室内のベッドに体を投げ出す。

部屋は六畳ほどの広さで、窓にはガラスがはまっている。ベッドの他には丸いテーブルと椅子が二脚、ランタンが一つ置いてある。洋服タンスのような開き扉のタンスもある。

質素と言えば質素にも見えるが、ベッドもなかなか柔らかいし、多分十分高級なんだろう。

食事はサンドイッチだった。だがパンはフランスパンのように硬かった。はさんである肉に塩味

がついてるのか、なかなか悪くない。

「亜空間倉庫の実験をしてなかったな」

服屋の店員に貰ったリュックをベッドに置いて――

「えー、亜空間倉庫！」

目の前の空間に、一メートル四方ぐらいの空間が口を開けた。

「なるほど……まずはリュックを入れて、出……え？」

入れたまではよかった。だがリュックを出してみようと思い、空間の口の中に手を入れようとすると、手はものすごく硬い何かに遮られるように、入れることはできなかった。

「は？ 入れるだけ？ どうなってるんだ？」

空中に浮いた亜空間倉庫の裏側とかも確認するが、どうにも触ることができない。

「あっ、アレか？ 生物は入れられない設定か？ ……なら」

頭の中で、亜空間倉庫を閉じる様子をイメージすると、亜空間倉庫の入り口は消えた。

手が入れないなら、念じれば出せるはず。

（リュック、出る）

ベッドの上に手を向けてそう念じると、リュックは何もない空間からひよっこり手の中に出てきた。

（なら、入れる方法は……入れ……あら、入れ。入った）

どうやら入れるときは、入れたいものを手で触っていないとダメらしい。

「なら容量は……おお！」

ベッドに触って念じると、ベッドは忽然と消えた。そして、洋服ダンス、テーブル、椅子など、部屋にあるものすべてを収納してみたが、全部入れることができた。

それから家具は元の位置に戻した。

「容量がわからないが、とりあえず使い方はわかったな。つうか、触って念じるだけで出し入れできるなら、空間の口を開ける必要はなんなんだ？」

全てがわかったわけではないが、実験は終わったので、リュックと大金貨と金貨を亜空間倉庫に収納して、残った硬貨はズボンのポケットに入れる。

「こつちもかさばるから収納したいけど、しばらくは様子見だな」

俺は冒険者ギルドを探しに行くために宿を出た。

猫耳女性に部屋の鍵を預け、またふらふらと街を歩く。

「しかし、猫耳か。猫耳の女の子とか見ると『異世界！』って気分になるな」

どうにか当面の生活の算段がつき、心に余裕ができた。

「情報が欲しいな。安心して情報を……あの人に頼るしかないかな……いや、少し様子を見よう」

すでに迷い人と知られていて、ある程度信用できそうなオカマの店員を頼るのが一番だとは思うが、あまり無警戒に他人を信用するのは危ないかもしれない。なんたってここは異世界なんだから。

「おつ、串焼きの屋台だ。……よし、情報収集と実験を」

屋台に近づく。

「こんにちは」

「っ！ な、なんでございましょう、貴族様！」

「……へ？ いや貴族じゃないから」

「なんでい。なら、そんなかしこまった挨拶なんてするな！」

（なるほど、挨拶ってのも庶民ではあまりしないのか）

「あー、なら、よう！ とか？」

「……まあ、そんな感じだ。兄ちゃん、どこから来た？」

「あつ、いやー、実は知り合いに馬車に乗せられてきたから」

「……人さらいにあつたのか？」

なかなか会話が上手くないかない。この世界の一般常識がない弊害だ。

「違うけど。まあ、俺のことはどうでもいいよ。この串焼きいくら？」

「おう、客か！ 客なら大歓迎だ。うちのはワイルドボアの肉にこだわって、さらに秘伝のたれを使ってる！ ……だから、銅貨五枚だ」

屋台の店主の顔は、ワイルドボアのくだりでは意気揚々としていたが、値段のあたりになるとこちらの様子を窺うような表情だった。

「とりあえず二本ちょうだい」

「あいよ」

大銅貨一枚を手渡すと、焼き上がった串焼きを二本、たれの壺に突っ込んでから手渡してくれた。俺は一つにかじりつく。

「旨い。肉は柔らかいし、ほどよい脂もある。たれは醤油ベースだな。甘辛くしてあって、日本の焼き鳥のたれみたいな味だ。焼き鳥の数倍でかくてボリュームだし、安くないか？」

「旨いな」

「だろ!? 味には絶対の自信があるんだ!」

「これ醤油と砂糖?」

「兄ちゃん、よくわかったな。醤油も砂糖も高いんだよ。だから、銅貨五枚は貰わないと赤字になっちゃう。なのにどいつも高え高えと言いやがって……」

醤油と砂糖がどのくらいの価値があるのか、現在はいらない。銅貨五枚が高いと言われるなら、多分高級品なのだろう。

「いや、これなら安いよ。このたれはおっちゃんだけなの?」

「あたりめえよ! この迷宮都市でも、いやこのケーンズ王国でも俺だけよ!」

「そう、おっちゃん、あと四本ちようだい」

大銅貨二枚をおっちゃんに手渡す。

「おう! ありがとよ!」

焼き上がるのを待つ間に、情報を引き出そう。

「醤油と砂糖はこの街に売ってるの?」

「ああ。高級品だから、迷宮都市ではマイア商会しか売ってないが……真似するなよ?」

「しないしない。ちよつと興味があつただけだ。あと、冒険者ギルドはどこかな?」

「冒険者ギルド? アレだぞ?」

おっちゃんは通りの反対側にある、三、四階建てくらいの建物を指差した。

（近かったな。それにここは迷宮都市か。醤油がマイア商会ね……。いろんな人から少しずつ情報を入手しよう）

「ほれ、焼けたぞ? ここで全部食うのか?」

さっきの余りの一本と、追加で受けとった四本を、まとめて右手に持つ。そして、すぐ亜空間倉庫にしまった。

「あつ」

「兄ちゃん、亜空間倉庫持ちかい。でも、冷めないうちに食ってくれよな」

「……亜空間倉庫、珍しくないの?」

うっかり収納してしまったが、おっちゃんが驚いている様子はない。

「ん? なに言ってる? ……まあ珍しいって言えば珍しいが、十人に一人くらいはいるだろ」

「あ、あー、そうだよ。冷めるの?」

「当たり前だろ。そんなのは兄ちゃんのがわかってるだろ?」

「あー、もちろんだよ。宿に帰ったら食べるよ」

「そうしな」

「じゃ、ありがとう」

「おう！ また来てくれよ！」

俺は冒険者ギルドに向かう。

（亜空間倉庫は珍しくないのか。ならEXは容量が問題か。普通は魔力依存なのかな？ 俺のは固定みたいだし、ばれたらヤバイとしたら、そのあたりか？ あとは、亜空間倉庫内に時間の流れがあるかどうかだ。この肉が冷めてなければ、俺の亜空間倉庫には時間の流れがないってことだ）
今得た情報を整理しながら、冒険者ギルドに向かった。



冒険者ギルドに入ると、奥にカウンターがあるが、それだけだった。

読んでいたラノベのように、受付の前が酒場になっていたり、依頼が貼り出されている掲示板代わりの壁などもない。

見た感じでは、このカウンターで全てを行うスタイルに見えた。カウンターは五つあり、そのうち四つは埋まっていた。

空いてるカウンターの女性は、フロアでまごまごしている俺をずっと見ている。

（ここは怪しまれないように……冷静に冷静に）

俺は何も知らない異世界人だとバレないように、澄まし顔でカウンターに向かう。

「すみません、冒険者登録をしたいのですが」

「研修の申し込みですね」

「あ、ああ、そうです」

（は？ 研修!? 冒険者になるのに研修があるの!?)

「冒険者とポーターどちらですか？」

「ポ、ポーター？」

さすがに聞き返してしまった。

「違うのですか？ 丸腰で鎧も着ていないので、ポーターをご希望なのかと」

「あ、あーポーターね、荷物持ちだよね？」

「……はい、そうです」

（ダメだ、怪しまれている）

「冒険者の方がいいかな。冒険者の研修？ 受けたいんだけど」

「魔導師としての登録ですか？」

「……いや、魔法は使えないな」

「では、剣か何かですか？」

「あー、その、なんだ、スキルがないと登録できないの？」

「……はい……冒険者の研修には戦闘スキルが必須となりますが……」

（マジかよ！ ハードル高^{たけ}いな！ 誰でもなれるんじゃないのか！）

「あのー一応言っておきますが、もしここで剣術のスキルがないのに剣術と申告されても、研修の最後に試験がありますから、わかってしまいますよ？ もちろん魔導師も同様に試験があります」

「……………」

（詰んでんじゃない！ 何この異世界！ ハードモードすぎるだろ！ ……こりゃ、手持ちの金でしばらく凌ぐのも選択肢に入るか？）

「ポーターでしたら、戦闘試験はありませんよ」

「……戦闘以外の試験はあるの？」

「あります。例えば、最終日は実戦訓練をやっているのです。五十キログラムの荷物を持って一日行軍をしたり。ポーターの荷物の運搬方法は、背負っても、手で持っても、台車を引くのもかまいません。ですが、ポーターは亜空間倉庫を持っている方が人気になりますので、亜空間倉庫をお持ちでないと仕事にあぶれるかもしれません」

（ここできたか。つうか、こんな説明があるくらい亜空間倉庫は珍しくないんだな。よかった）

「あつ、亜空間倉庫あります」

「それでしたら、ポーターでご登録なさってはいかがですか？」

「冒険者とポーターの違いは？」

「ランクのあたり方が違います。ご存知だと思いますが、ランクには、鉄級、銅級、銀級、金級、プラチナ級、ミスリル級とあります。鉄級は駆け出し、銅級で一人前、銀級でベテラン、金級で一

流。それ以上になりますと、世界でも超有名人とかになりますね。依頼ごとにランクに対応した難易度が設定されており、冒険者は依頼の達成度でランクがあがっていきます。ポーターは、どんなに依頼を達成してもランクは上がりません。代わりに、ギルドに累計いくら分の素材を売ったかでランクがあがっていきます」

「ちなみに、金貨百枚分をギルドに売ったら？」

「金貨百枚ですと、一気に銀級ですね。銀級は金貨十枚から九百九十九枚までです。千枚からが金級になります。ちなみに、プラチナ級にあがるには白金貨千枚からです」

「……あがりにくいんだな」

「もちろんあがりにくいのですが、通常ポーターがまとめてギルドに納品するので、パーティー分全員分が加算されます」

（待てよ？ ランクがあがるメリットはあるのか？）

「ランクがあがるメリットは？」

「冒険者は例外を除けば、自身のランクの一つ上までの依頼しか受けられません。ランクがあがれば、より実入りのいい依頼が受けられるようになります。ポーターに関しては、買い取りにボーナスがつきます。銀級で五パーセント、金級で十パーセント、プラチナ級で二十パーセントです」

（なかなかすごい、けど）

「それ、ギルドにメリットあるの？」

「例えば、オークを大量に狩れたとしても、オークは一体で百キログラム以上。普通は持ち帰るこ

とができません。ですが実力のあるポーターなら、そういったものも持ち帰ることができて、冒険者の懐も潤います。さらにギルドも素材を入手できます。素材が都市に入れば、素材を扱う商店も潤います。冒険者がいなければ討伐はできなかったでしょうが、ポーターがいなければ都市に還元できなかったのです。ですから、優秀なポーターは貴重なのです」

(ちよつと矛盾があるな)

「さっきポーターの試験は五十キログラムって言ったよね？ でも、実際はオーク一体でさえ百キログラム以上だよ。五十キログラムで試験を通過しても意味ないんじゃない？」

「五十キログラムは、ダンジョン用のポーターの最低基準になります。ダンジョンでは魔物の死体が残りません。ですから、運ぶものはダンジョン探索用の食料などを持つていくこと、魔石やドロップ品を持ち帰ることとなります。だから、フィールドでポーターをするのは不十分ですが、ダンジョンならば亜空間倉庫がなくても仕事をすることが可能です。ご存知でしょうが、亜空間倉庫は重さに制限がありません。亜空間倉庫は魔力によつて容量が決まりますので、重量は問題ないのですが、軽くてかさ張るものを収納するのには向いてません。なので、ダンジョンに行かない冒険者はフィールドで狩りをして、亜空間倉庫を持っているポーターを雇います」

(なるほど、重さは関係ないのか。俺の亜空間倉庫はオーク何体分ぐらい入るのかな？ 試そうにも、俺にはオークを倒せそうにないな。そもそも見たことがない)

「最後に。ポーターは単独で冒険者の依頼は受けられないのかな？」

「受けられます。ただ、依頼を達成してもランクがあがらないだけです。あくまでも算定は累計買

取り額です。それに、ポーター単独では、金級ポーターでも一律銀級までの依頼しか受けられません」

(なるほど、それ以上はろくな戦闘スキルもないはずだから、やれるわけがないからってことか？)

「大体わかりました。ポーターの研修を受けたいのですが」

「ポーターの研修は明後日の朝から五日間となります。冒険者は七日間ですが、基本的に合同の研修です。装備を整えてきてください」

「わかりました」

「ではこちらの用紙に記入を」

俺は代筆してもらい、申込書に記入してからギルドを出た。

研修を行うのは意外だったが、ポーターって職業があったのはラッキーだ。戦える力がなくても食いつぶれることはないからだ。信頼を得られれば、冒険者から守ってもらえるかもしれない。

さて、装備は明日買いに行くとして、今日はもう日暮れだ。

濃密な一日だった。まだ異世界に来て一日目とは思えない。

実は異世界に来たら行きたかったところがある。——娼館だ。

でもさすがに一日目からはどうなんだろうと思ひ、おとなしく宿に帰った。

一夜明けて雑貨屋を探しに街へ出る。

昨日はお湯を貰ったが、一メートルぐらいのたらいに、お湯が十センチ程度だ。

タオルも何も用意されてなかったたので、顔を洗うくらいしかできなかった。なので、タオルや歯ブラシを探しに雑貨屋を探す。あつ、昨日の串焼きの屋台だ。

「おう兄ちゃん！　また買いに来てくれたのか？」

「そうなんだけど、まずは雑貨屋に行きたいんだ」

「雑貨屋はここを右に行けばあるぜ？」

「ありがとう。帰りに寄るよ」

「おう、待ってるぜ」

思惑通りに雑貨屋の場所を聞いた。

「いらつしやいませー」

若い女の店員だった。あつ、耳が長い、エルフかな？

この世界の女性は、人族も獣人も胸が大きい人が多い。むしろ今まで見た女性は、ほぼ大きな胸をしている。けどこの人はエルフだからか、あまり大きくはない。

いや、この人だって絶壁ではない。服の上からだか、きちんと膨らみはある。

俺は店内を物色する。タオルを数枚、歯ブラシを二本、木のコップと皿を四人分、石鹸数個をカウスターに置いた。

「洗濯用の石鹸つてあるのかな？」

「ありますよ」

出てきたのは、ライチのような皮が茶色い木の実だった。

「えっと、これが石鹸？」

「見たことないですか？　これを洗濯物と一緒にいれてごしごしすれば、きちんと泡立ちますよ」

「そっか。じゃあこれを五つ。それと、ティッシュつてないの？」

「ていつしゅですか？」

「あー、じゃあ、トイレ行ってお尻を拭くものは？」

「ああ、チリシですね。そこにあります」

店員に指差された方向を見ると……紙が山積みされていた。見た感じからもゴワゴワしてそうだし触ると、柔らかめの新聞紙ぐらいだった。これは難儀しそうだ……

「変なこと言うけど、これは世界共通なんだよね？」

「えーと、お客さん、どこから来たの？」

（まずい！　迷い人疑惑が！）

「……ここだけの話だけど、箱入り息子だったんだ」

「ああ、貴族様」

苦しいが、店員を納得させるにはこれが一番に思えた。

「貴族様は水で洗うと聞いているわ。違うの？」

「あー、俺、ちよつと今家出中で……」

言い訳には苦しい。

「あははっ、そうなんだ……そう言えば、最近水でお尻を洗えるトイレが発売されたとか……」

「嘘！ それどこ!?」

「ここを出てすぐ左に曲がって、一本目を左に行くと、マイア商会があるわ。そこにあるはずよ」

「ありがとう！ 行ってみる！」

俺は代金を払い、雑貨を亜空間倉庫に入れて、マイア商会に向かった。

飯、寝るところ、トイレは大事だ。

食べるものはなんとかなりそうだった。昨日の晩飯も美味しく食べられた。寝るところも今は快適だ。だがトイレを忘れていた。まだ大はしてなかったが、あの紙で拭くのはお尻が痛くなりそうだし、拭き残しが盛大に出そうだった。

マイア商会はすぐにわかった。まず店構えがでかく、地球の洋便器そっくりな絵が描かれた看板が店の前に出ていたからだ。

「いらっしやいませ、ご用件はなんでしょうか？」

「あれが気になるんだけど」

店内には、白い陶器でできた洋便器が五個並んでいた。字は読めないが、POPのようなものがついている。商品宣伝だろうか。

「失礼ですがお客様、貴族様でしょうか？」

「いや、貴族じゃないけど、ダメかな？」

「……あちらに書いてありますが、お支払いになれますか？」

「……ごめん、読めないんだ」

「あちらは白金貨になりますか？」

店員は明らかに俺を蔑んだ目で見ている。

そりやそうか。さすがに白金貨を持つてるとは思わないよな。でも、内容によってはどうしても買いたい。

「詳しく話が聞きたいんだ。どんな性能なのかな？」

「……あちらは最新の魔道具です。あの中に用を足すと、中は亜空間倉庫になっており、便はそこに収納されます。夫婦お二人でお使いになっても、十年は満杯になることがあります。もちろん排出も可能です。さらに、水の魔水晶と風の魔水晶がついておりまして、水でお尻を流し、風で乾燥させることができます。加えて消音、消臭機能もついている優れたものです」

「魔水晶とは？」

「……魔水晶をご存知ない？ 魔水晶は大きな魔石を加工したものです」

「なるほど、永久に使えるの？」

「はい。ですが、魔水晶に魔力を充填していただきます。一回分であれば、ほんのわずかな魔力で補えます」

「魔力の込め方は？」

「……お客様、あまりからかわないでいただきたい」

（ありゃ、このへんも常識か？）

「あー、普通の魔道具と同じかって意味だけど」

店員はあからさまに顔をしかめる。

「……さようです。魔水晶に手を当てれば、自然と一回分の魔力が充填されます」

（そういう方式なんだ。ってことは、トイレの度に毎回魔力が必要なんだな。俺、魔力どのくらいなんだろう？）

「亜空間倉庫から便を出す方法は？」

「こちらのレバーを下げれば放出されます」

「なるほど、いくら？」

「……白金貨一枚、大金貨九枚になります」

（おいおい、俺の手持ちほぼ全額じゃねーか。まるでこっちの有り金を知ってるかのようだ）

「高い。あれとあれをつけてくれないか？」

俺が指定したのは、クイーンサイズぐらいのベッドと、ダイニングテーブルと椅子四脚のセットだ。どちらも高級そうだった。

「いいですよ、即金で払えるのなら」

店員はニヤアとバカにするように笑った。

（高い。でもトイレは絶対欲しい。ベッドとテーブルも今は必要ないけど、あった方が夜営とかできそうだし。まあこれだけじゃ無理だけど。……それより、このバカにした顔をギャフンと言わせてやりたい）

俺は手をダイニングテーブルの上に出し、大金貨を全部出現させた。

「なっー！」

「数えてくれる？ 大金貨十九枚あるはずだけど？」

「……………」

店員は驚愕（きょうわく）して震えた。そして、しげしげと大金貨を見つめている。

俺はその間に、ベッドと洋便器を一つ亜空間倉庫に収納する。

「大金貨をどかしてくれるかな？ このダイニングテーブルと椅子もセットだもんね」

店員は顔を青くする。

「お、お客様……ベッドは……？」

「ああ、もう収納したよ？」

「あ、あれは大金貨六枚もする、超高級ベッドでして……」

「だから？ 払えるならいいって言ったよね？」

「ぐっ……」

俺は椅子四脚も収納する。大金貨をテーブルから集めて店員に押しつける。

「じゃ、これも貰（もら）うから」

「お、お待ちください……」

「なに？ まさか嘘だったの？ でも、どうせトイレもぼったくったんじゃないの？ 俺はそこには触れなかったよ？」

「っ！ ……お客様、文字が読めないのでは？」

「さあね」

（くっそこいつ！ 洋便器をぼったくりだとカマかけたら当たりかよ！）

店員は苦虫を噛み潰したような顔をしていたが……やがて、大きくため息をついてから、覚悟を決めた顔つきに変わった。

「わかりました。このルーカスⅡマイア、商人の意地があります。今回は私の負けです。どうぞお持ち帰りください」

（こいつが店主か。まあ、俺は金を払ったしね。文句言われる筋合いはない）

「ありがとう、それじゃ」

金が一気に消えた。残りは金貨九枚と大銀貨などが数枚。だけど、しばらく暮らすのには十分な気がする。

次は防具屋だ。あの屋台に戻ろう。

「ありがとう、買ったよ。二本ちょうだい」

「毎度！」

大銅貨一枚を払い、たれにつけられた二本を貰う。旨い。本当に旨い。

ペロツと平らげてから――

「防具屋はどこかな？」

「防具屋はこの先まっすぐだ」

「ありがとう」

「また来いよ！」

（あのおっさんは、いいおっさんだ。しかも串焼きも旨い）

俺はこれからも利用しようと心に決めて、通りを歩く。しばらくすると、防具屋が見えた。

「すみません、明日からボーターの研修なんですけど、いい防具ありますか？」

店に入るとドワーフがいた。もうラノベのイメージそのまんま、ひげ顔で背が低い、そのまんなのドワーフだ。その人に相談した。

「予算はいくらだ？」

「あまりお金はないけど、無理したら金貨八枚ぐらいは出せるよ」

現状金貨は九枚だ。一枚ぐらいいは保険で持っておきたい。

「武器はあるのか？」

「あー、ないね」

「待ってろ」

ぶっきらぼうなドワーフのおっさんは、店内から革の鎧と籠手、すね当てを持ってきた。

「つけてみる」

革鎧は前と背中側で二つに割れ、それをベルトで留めるタイプだった。籠手は腕をくるむようにつけて、やはりベルトで留める。すね当ても同様だ。

（うん、悪くない。動いても邪魔にならないな。硬さもあるのに柔軟性も多少ある。いいね）
「いくら？」

「これを持って」

俺が革鎧を装備してる間に、鞆がついた剣帯と剣を持ってきていた。

「重いかな？」

少し素振りをする。

（多少重いけど、振れないほどではないな。それよりこの重厚感が異世界に来た！　って感じがする）

「ギリギリかな」

「お前ポーターだろ？」

「ああ、うん」

「なら、とりあえずはそれにしとけ」

「いくらかな？」

「全部で金貨五枚でいい」

「……安くない？」

一般庶民の生活費からするとい値段だが、ベッドやトイレ、シャカシャカジャージの値段を考えると、鎧はかなり安く思えた。

「防具はまともだが、剣は弟子の作品だ。まだ商品と言えるレベルじゃない。ただでいい。剣帯はサービスだ」

「ありがとう、大事にするよ」

「装備は消耗品だ。たまに見せに來い。それと、ポーターは金を切らすんじゃないねえ」

「どうして？」

「一流のポーターは、冒険者に言われなくても、万一の備えはしとくもんだ」

（おおおおお！　これは格言ってやつだな！）

「本当にありがとう。そうするよ」

俺は金貨五枚を払い、店を出た。

ドワーフのおっさんの格言通りに、備えをしようと思った。仮に今ダンジョンに入るとして、足りないのは水と食料だ。

ただそれを買う前に、実験の結果を見よう。

亜空間倉庫から、昨日買った串焼きを一本だけ出そうと念じる。

すると、手に串焼きが一本現れた。見事に湯気が立っている。俺はそれにかじりつく。

（うん、味も問題ない。やっぱり俺の亜空間倉庫EXは、普通の亜空間倉庫と違って、時間の概念

がないみたいだ)

これで食料と水を大量に買ってあげる。

適当に歩き回り、水を樽で三つ、屋台でホットドッグのようなものやサンドイッチのようなものなどを買って込んだ。正直あまり美味しそうではなかったたので、食料は二十食分ずつにしている。水の樽は三つだけだが、一つがワインの樽のようにバカデカイ。正直樽の方が高かった。樽と水、食料で金貨一枚を使った。

準備ができたので宿に帰る。

部屋の鍵を猫耳女性の受付に貰い、部屋に入るとトイレを出してみた。

「まずはここに魔力を、か」

水色の魔水晶とうす緑の魔水晶が、便器の左側の下あたりに並んでついている。最初に水色の魔水晶に手を当てる。

「ん？ なんもならないな……うつ」

体内から何かが抜かれる気がした。一気に体がだるくなった。

「これが魔力か……次は風の魔水晶……うつ！」

俺は気を失った。



目が覚めると、朝日が昇るか昇らないかぐらいの時間だった。

「あぶねえ……気絶で寝過ごすところだった。しかし、必要な魔力はごくわずかとか言ってたのに……つてことは、俺の魔力はごくわずかしかないのか……」

思わぬところで現実がわかってしまい、がっかりする。

「俺って本当にチートなしなんだな……生きていけるのかな？」

とりあえずズボンをおろし、トイレに座ってみる。

座りなれた感覚だ。

「これはたぶん、迷い人の知識だろうな。まんま洋便器だし」
用を足す。

「おお、本当に臭くない……ない！」

便器の中を座ったまま覗き込むと、出した便がなかった。

「じゃあこれで……おわ！」

水色の魔水晶に触れば、下から水が噴き上がってきた。

水圧はウォシュレットより若干弱い。だが水量が半端ない。十センチぐらいのパイプから、水が噴き上がっているような感覚だ。お尻全体を洗われているみたいだ。

水色の魔水晶から手を離し、うす緑の魔水晶に手を当てる。すると――

「おお、お？ うーん、これもイメージと違った」

そよ風程度がお尻に当たっているのはわかるのだが、風を直接当てて乾かすというよりも、風の魔法的な何かで乾燥させているという感じだ。原理はわからないが、お尻を触るとさらさらだ。

「うん、快適だな。まったく問題ない。後悔はない！」

たかがトイレについて気持ちがまったくないわけではない。だがそれを考えたら快適さは得られない。

トイレに限らず、異世界では金で命は救えない。なんでも物品に変えて持ち歩かないと、いざというときに何もできないのだ。

これはラノベで得た知識であった。

冒険者ギルドにたどり着いた。

ギルドに入ると職員に案内され、裏の訓練場に連れてこられた。訓練場は、バカでかかった。学校とかにある四百メートルトラックが丸々入るほどの大きさで、競技場のように観客席が回りを囲んでいる。むしろ、なぜこんなに大きいものが街中まちなかにあるのに、俺は気づかなかったのか不思議でならなかった。

まだ研修は始まらないみたいだ。周りを見ると三十人ほどいる。十代の人間がほとんどで、誰もが腰に剣を差していたり、槍を背負っていたりしている。人種は、青い髪をした人族、虎の獣人、弓を持ったエルフ、まるでビキニアーマーのような露出の多い装備をした女、様々だ。

こう見ると、俺の個性のなさ逆には浮くのではないだろうか。

「よう、おっさん、冒険者か？」

いきなり後ろから肩を叩たたかれた。振り向くと、金髪のイケメンが俺の肩を掴んでいる。

「いや、ポーターだけだ」

そいつは、俺を頭から爪先まで品定めをするように見てきた。

「まっ、そうだろうな。でも、その体格でポーターできるのか？」

「あー、亜空間倉庫があるから」

「ほう」

金髪の男はギラリとした目付きになった。

「まっ、使えそうなら雇ってやってもいいぜ？」

「は——」

「あなた、ポーターなの？ 私もよ」

俺がイケメンに受け答えしようとすると、女が割り込んできた。

「私はメリッサ」

「俺はヨシトだ」

「そう、よろしくね」

メリッサが手を差し出してきた。俺は握手をする。柔らかい手だ。女性と握手するのはなんかもすごい久しぶりな気がする。名前を名乗ったのもすごく久しぶりな感じだ。



彼女は犬系の獣人だろうか。耳もあるが、なにより尻尾^{しっぽ}がきつねや犬のようにふさふさだ。

「俺はダンだ、よろしく」

金髪イケメンのダンは、ターゲットを女に切り替え、メリッサに手を出した。だがメリッサは、
「あなた、ポーターを軽く見ると後悔するわよ？ 冒険者とポーターは対等なんだから」
と、ダンに差し出された手を握らずに文句を言った。

「ポーターはあくまで荷物持ちだろ？ 冒険者は命をかけてるんだ、対等じゃねえよ」

「そう。そう思うんならそうすれば？ あなたと組むポーターがいるといいわね」

（なんでこいつらしいきなり喧嘩^{けんか}腰^{こし}なんだよ。若いからか？ いや、日本じゃ若くてもこれはない）

「俺たちはまだこれからだよ？ 二人とも喧嘩^{けんか}腰^{こし}はよくないな」

「私はあなたのためを思って」

「ふん、せっかく声かけてやったのに！ 職があるといいな！」

ダンは去っていった。

「あの子バカじゃないの？ 亜空間倉庫持ちが職にあぶれるわけじゃないじゃない」
やれやれって感じた。

忘れていたが俺は鑑定を持っていた。メリッサを鑑定してみる。

【メリッサ】

名前…メリッサ

年齢…15／性別…女／種族…犬人族／レベル…6
称号…なし

STR…C／VIT…C／DEX…B／AGI…C／INT…D／MEN…D

スキル…体術／亜空間倉庫

種族スキル…嗅覚探知／腕力上昇

潜在スキル…隠密／震発見／震解除／乾坤一擲

（おお！ すげーたくさんスキルがあるな。体術つてのは空手みたいなのか？ 柔道かな？ でも、ステータスは似たり寄ったりだな。レベル6でこれか。レベル6つてどのくらいでなれるんだろ。だが一番気になるのは、潜在スキルだ。潜在？ まだ獲得できてないってことか？）

「あー、メリッサはもう魔物とかと戦ったことあるの？」

「……え？」

「え？」

メリッサは俺が質問すると、びっくりしてしまった。

「あなたなの？ もしかして貴族なの？」

「あつ、いや、そうじゃないけど、箱入り息子だったっていうか……」

「普通、村で生活していれば、ゴブリンやホーンプリットぐらいいは退治するはずだけど……農作物も食い荒らされるし……」

（またまた予想外！ そういうものなのか！ ……じゃあ、この年齢でレベル1つて相当ヤバイんじゃない……）

「そうだよね……はははっ」

「ひよつとしてあなた、剣も振ったことないわけ？」

「いやー、まあー、……はい」

「呆れた。ポーターだつて襲われたら、最低限は身を守れないと死ぬわよ？」

「そうだね……」

「本当、大丈夫？」

メリッサに下から覗き込まれる。

「これから修業するよ……」

「……気をつけなさいよ……」

メリッサも去っていった。

（うわー、これは想像以上にハードモードなんじゃないか？ つうか俺、生き残れるのか？）
まだ街から一步も出ておらず、魔物も見ることがない。だがなんだかんだ言つて、やりたいようにやれていたの、異世界を舐めていた。

（トイレなんて買つてする場合じゃなかったんじゃないか？ すげー装備とかどっかに弟子入りするとか、そういう風に金を使わなきゃいけなかったか？ こりゃ失敗したな……）

「――待たせたな諸君！ これより冒険者とポーターの合同研修を始める！」

筋肉ムキムキのおっさんが訓練場に現れて、研修が開始された。

「はあ！ はあ！ はあ！ はあ！ はあ！ はあ！」

軽い説明を受けたあとは、場内のマラソンだった。

「冒険者もポーターも体力が命だ！ この程度でへばってたら探索なぞできんぞ！」

「はあ！ はあ！ はあ！ はあ！ はあ！」

教官から叱咤しつたの聲が飛ぶが、俺は既にギリギリだった。歳は二十一だが、高校を卒業してからは運動らしい運動をしていない。いきなり走り込みとかバテるに決まっている。

「そのポーター!! そんなんで冒険者の荷物が持てるのか!!」

（はあ！ はあ！ 亜空間倉庫が、はあ！ はあ！ あるっての！）
声にも出せずにひたすら走る。

俺が周回遅れになるかどうかあたりで、走り込みは終わった。

「腕を上げろ!! お前らが疲れてても魔物は待つてくれないぞ！」

今度はひたすら素振りだ。

とつくにマメができて潰つぶれている。血が滴したってぬるつとする。

「えー、であるからして、ダンジョンでは魔物の死体が残らず——」

次は座学だった。だが、俺は腕も足もブルブルしている。

（これがあと四日？ 無理だ、明日筋肉痛で動けるわけがねえ）

この日はこれで終わった。

「貸してみなさいよ。本当に軟弱なんじやくね。今までどうやって生きてきたの？」

医務室でメリッサが、俺の手のひらの手当てをしてくれている。

「ここまで軟弱なんじやくなのは俺も初めてだ。手のひらなんてのは、男なら農作業や木こりなどで、皮が厚くなってるもんだがな」

「まったくよ。城のお姫様だって、もうちよつと丈夫よ？」

言われ放題である。ここにはメリッサと教官、俺がいる。

「俺は不合格ですか？」

「冒険者なら確実に不合格だな。だが、お前はポーターだ。ポーターなら荷物が運べればとりあえず問題は無い。この訓練は簡単に死なれては困るからやつてるだけで、不合格にはしない、だが荷物を持てるのか？」

「あ、それは平気みたい。私もだけど、ヨシトも亜空間倉庫持ちだから」

「そうか。亜空間倉庫持ちは貴重だからな。ならば大丈夫だろう」

ここで、医務室に入ってきた。

「いたいた。メリッサちゃん、これから飯でも行かない？」

青い髪をした、これまたイケメンだ。こいつも若い。

「実は僕たち、既にパーティーが決まっててさ。メリッサちゃんはいいいポーターになれそうだから、仲良くしたいんだ」

やはりというか、冒険者とポーターが合同で研修するのは、こういう意味もあると思っていた。座学で、ギルドの近くに冒険者の斡旋所^{あつせんじょ}があり、ポーターは冒険者を、冒険者はポーターを雇えると聞いていたが、固定の方がいいに決まっている。この研修は、そういう出会いの場としての意味もあると思っていたのだ。

「ヨシトも一緒ならいいわ」

「ヨシト？」

メリッサが俺を見る。それに釣られて青髪イケメンも俺を見た。

（おいおい、俺を巻き込むなよ）

「いやー、俺はいいかな」

「そう、なら私も行かないわ」

「……待ってよ。えーとヨシトさんって言うのかな？ ヨシトさんはメリッサさんの友達？」

「あー」

「そうよ」

俺はメリッサをジト目で見る。メリッサはなにやら勝ち誇ったかのような顔だ。

「なら、ヨシトさん、一緒にどうかな？」

俺は行きなくなかったが、青髪イケメンが、もう頼むよ!! と言わんばかりの顔をするので、空気を讀んだ。

「わかった。じゃあ行くよ」

「本当!? ありがとう!」

「あら、予想外だったわ」

「……メリッサ、覚えてろよ」

面倒ではあったが、なんとなくこんなやり取りにも懐かしさを感じて、飯に行くことにした。



「改めて、僕はシェイズだ」

「俺はグレッグだ」

「私はエマよ」

青髪イケメンのシェイズ、大きな大剣を背負ったグレッグ、魔法使いのローブを着たエマだ。

「私はメリッサ。ポーターを目指してるわ」

「あー、俺はヨシトだ。俺もポーター希望だ」

「私たちは二人とも亜空間倉庫を持つてるわ」

シェイズの案内で酒場に来た。見た感じは、泊まっている銀の鐘亭の方が高級そうだ。

テーブルに座り、丸テーブルを五人で囲んでエールで乾杯する。

（ぬるい、うすい。このエールつてのは、ぬるくてうすいビールだな。ちょっと臭みもある）

「三人は同郷の出身なの？」

「そうなんだ、俺たちはコミーズ村から来たんだ」

「そう、私はミスク村よ」

「ほう、メリッサはミスク村か。ここ迷宮都市からはかなり遠いな」

「結構馬車代かかったんじゃない？」

「ええ、エマ。ちよつとはね。でもポーターとして迷宮都市の近辺でやっていきたいから。ヨシトはどこから来たの？」

（こうなるよね。またまた浅はかだった。この程度の質問の答えは用意しとかないとな。……ラノベの定番のやつ、行ってみるか）

「あまり大きな声じゃ言えないんだが、俺は山の中で師匠と暮らしていたんだ。師匠からもう出ていけとこの街に連れてこられたんだ。だから、あまりこの辺の地理はわからない」

俺はここで「へー」とか「ふーん」で終わると思っていたが、なんと追加の質問が降ってきた。

「山とはウオブリ山か？」

「あ、いや、山の名前もわからない」

「修業してたのに、あんなに軟弱なんじやくなのかい？」

「いや、ははは……」

「何の修業してたのよ？」

「あー、亜空間倉庫の？」

「亜空間倉庫は先天的なもので、修業では覚えられないんじゃないのかい？」

「いやー、容量的な？」

「なら魔力が多いのね」

「いや、魔力はちよつと……」

「お前は何を言っている？」

（デスヨネー！）

シェイズたち三人に矢継ぎ早に攻められて、返す言葉もなかった。その間も、メリッサだけはじーっと黙って俺を見ていた。

「ちよつとトイレに……」

俺は席を立ててトイレに行く。

（無理ゲーすぎんだろ！　つうか俺の異世界、なんでこんなに無理ゲーばかりなの!?　上手く行ったのはジャージが売れたことだけじゃん！　こんな異世界じゃねーよ！）

ゆっくりトイレから帰ってくると、メリッサが場を仕切っていた。

ほぼ四人で会話がなされ、俺はいない人扱いになったが、逆に都合がよかった。その分メリッサは、急に自分からばんばんシェイズたちに話しかけている。

（このまま早く終わってくれ……）

一時間も経っただろうか、飯を食べ終わりようやく解散になった。
俺も割り勘で金を払い、元氣よく手をあげる。

「じゃあメリッサ、また明日！」

「送ろうか？」

そこへシェイズが、メリッサに声をかけるが……

「大丈夫、ヨシトが送ってくれるから」

俺はメリッサをキツと睨む。

（はあ!? そんなこと一言も言っただろ！ なぜそうなる！）

「そうか、危なくなったら大声を出せよ」

シェイズはあっさり引き下がり、仲間二人とともに帰っていった。

するとメリッサがこっちを向いた。

だが、表情は先程と打って変わって笑顔の欠片かけらもない。

「あなたの宿はどこ？」

「いや、俺が送るよ」

「あなたの宿はどこ？」

「……送るって」

「あなたの、宿は、どこ？」

「……………」

（なんなんだ一体！ 何がしたいんだこの犬女！）

メリッサは目線を一切逸そらさない。もう仕方ないので答える。

「銀の鐘亭だよ……」

「行くわ」

メリッサは歩き出した。

俺は逃げてやろうかとも思ったが、さすがに可愛いそうなのでついていく。

……銀の鐘亭についてしまった。

「部屋はどこ？」

「……メリッサ、男の部屋だぞ？」

「やれるもんならやってみなさい？ でも私の質問には絶対に答えてもらう」

そう言われたらもう返し方がない。メリッサの決意は固かった。

（いやいや、なんでこんなにしつこいの？ なんだこれ、詰んでないか？）

仕方なく部屋に入れて、ランタンに灯りをともし、二人で椅子に座る。

「いい部屋ね」

「臨時収入があつてね」

「さすがに勇者は違うわね」

（なんでええええええ！ どこからそうなった!?)

「……勇者って何？」